

美しいピアノ講師に溺れた夫

その人に会うのは今日が二回目だった。

妻の大学時代の友人で、私たちの結婚式以来会っていなかったということだったが、私の突飛な思い付きで再会することになったらしい。

ある夜、私は言い出したのだ。「ピアノをやってみようかな」と。それを聞いた妻の葉子^{ようこ}は大して驚きもせず「へえ、いいんじゃない？」と言った。

私のことをよく理解しているようで、結婚して二十五年も経てばそんなもんだろうと思った。

あまりまともには受け取っていない様子で、適当に聞き流した感じに見えた。

「でも、この年から始めてもいいのかなあ」

五十歳になる私はそう思った。

普通は子供のころから習うものだと思っていたからだ。先生について習うにしても、ちょっと恥ずかしい年齢だ。

「そんなこと関係ないわよ。いくつから始めてもいいだろうし、五十歳から始めちゃいけないなんてことはないんだから」

「まあ、そうだろうけど……」

実は以前から思っていたのだ。男がピアノを弾けたらカッコいいだろうなど。こんなことを人に言ったことは一度もない。照れくさいのもあったし、自分はピアノなんていう柄じゃない。そう思って言い出せずにいたのだ。

「そんなこと言ったら何にもできないじゃない。それがあなたの生きがいになるんだったら、私はいいと思うけど」

妻は昔から物分かりのいい方だった。私がやりたいということにも積極的に協力してくれる性格だった。このことを反対しないと思っていたが、思い通りの反応を見せたので、私は少し安心した。

「私の友達でピアノやってる子がいるから訊いてみようか？ その子はいくつもの大会やコンクールで優勝してる子でね、ピアノの腕は保証するわよ」

「そんなすごい人じゃ無理だし、迷惑だよ。今はユーチューブでも練習できるし、わざわざ講師になんてつかなくたって」

プロのピアニストなんて怖気づいてしまう。私とは住む世界が違う人なのだ。そんな人に教えてもらうなんて、恐れ多くて緊張しすぎてしまう。

「大丈夫よ、その子なら。気を遣うような人じゃないし、誰とでも気さくに話せる子だから。ユーチューブなんてダメよ。やるならちゃんと先生につかないと」

妻の言うことは正論だった。ユーチューブでもピアノのレッスン動画はあるのだが、解らないことがあったときに質問することができない。ちゃんと講師につけば、なんでも質問が

できるのだ。何かを習うなら、先生に教えてもらわないと上達しないということは自分でも解っていた。

しかしそんなにトントン拍子に話が進んでしまうと、私としてもついていけないのだ。まだやると決めたわけではないし、心の準備ができていないのだ。本当にやるとなったら、今の生活の中でどうやって時間を見つけるかも考えなければならないのだ。

「ちょっと聞いてみるね」

妻は私の意志など関係なく、さっさと携帯を持って部屋を出て行ってしまった。

「お、おい……」

リビングを出て、その友達に電話をかけているみたいだった。少し長い話になっているのは、懐かしさを共有しているからだだろう。廊下での会話が断続的に聞こえてきた。

それを聞いて私は少し緊張を覚えた。まだやるとは言ってないし、決心をしたわけでもない。本当は先生などに付かず、自分でこっそりとユーチューブのレッスン動画で練習しようと思っていたのだ。それがまさかこんな展開になるなんて想像もしていなかった。

落ち着かない気持ちで妻を待っていると、十分ほどしてからリビングに入ってきた。

「いいって。今は時間があるから、いつでもどうぞって快く了承してくれたわよ」

レッスンを受けるのは私なのに、妻の方が張り切っている。まあ、私の趣味を後押ししてくれているのだからネガティブに考えるのもよくないか……。

「ああ……そうか」

「今度の日曜日にそっちへ行くって約束しちゃったけど、いいでしょ？」

「ええ！ もうそこまで決めちゃったの？」

「なんか、都合でも悪いの？」

「いや、特に予定はないけど……」

さあたらさあだ。妻は行動力があって、昔から何をするにも素早く行動する質だった。それでいつも私の方が苛立たせていたのだ。

私は普通のサラリーマンなので、土日が休みなのだが、インドア派でたいいは家でのんびりしている。それが性に合っていた。

妻がどこかへ遊びに行きたいと言えば、一緒に行くことはあるが、そうでない限りは家にいるのが好きだった。

妻は妻で、私のそんな性格を理解しているので、近所の友達と一緒に買い物に行くか、一人で出かけることが多かった。

それでお互いに上手くいっていたのだ。私は妻の買い物に付き合うのは苦手だし、妻も私などいないで、一人で買い物をしていた方が気楽なようだった。

その妻は今年四十六歳になり、私よりも四つ下だった。二人の間に息子が一人いるのだが、一年前に音楽がやりたいと言い出して、高校卒業後に東京へ行ってしまったのだ。そんなこともあり、今は妻と夫婦二人暮らしだ。